

天道は冥冥

——荻生徂徠の知的世界——

小畑 進

一、不_レ願_レ爲_二「道学先生」

二、道難_レ知亦難_レ言

三、以_レ信_レ聖爲_レ先

一、不_レ願_レ爲_二「道学先生」

「東海は聖人を出ださず、西海も聖人を出ださず。是れ唯詩書礼楽の教へ爲る也。」^①とは、荻生徂徠（一六六六—一七二八）がよくその豪傑の氣風を以て、「学則」冒頭に發した名言であるが、その末尾は、「寧ろ諸子百家曲芸の士爲らんも、道学先生爲ることを願はず。」^②と、いささか奇妙と目される私的な言辭で結ばれている。以て門下の旨とすべしとの情念を籠めた彼の一太刀、徂徠先生の所懐であつたのであろう。以後、この一言は朱子学者に、偏狹固陋の学説を墨守し、時勢に暗き朴念仁の「道学先生」なる蔑称を固着させた感がある。

言われるところの「道学者」とは、孔・曾・子・孟の道統伝承を自任する宋学者のこと、それゆえに「道学者」と

称するのであるが、同時に世上、個人的道德倫理の講説をもつて能事おわれりとし、現実の政治、経済、社会の実学に疎く、迂遠なる腐儒との諷刺を簞めたものである。みずから、かかる道学者先生たることを肯んじなかつた徂徠は、鋭意、政治、経済、教育、文学、さらには軍学に参究し、天地・人間の活物なる如く、学問も活学たるべしとの姿勢を貫いた。「人は活物にて候。夫故に国家を治候も、人を教訓いたし候も、又は我心我身を治め候も、木にて人形など割見候ごとくにはならぬ物に候」とは、もっぱら活ける学問をと志す意気を示すものであつた。

これが私書簡となると、忌憚なく、「世儒理に酔ひ、道德仁義、天理人欲、口を衝いて以て発す。不佞^{ふねい}之を聞く毎に便ち嘔^{おう}喊^{かん}を生じ、乃ち琴を弾じ笙を吹く。否んば即ち閑閑たる雉^{しやうきやう}鳩^{きう}、以て其の穢を洗う。是に於て又柳下惠に之れ及ぶ可からざるを愧ず」と、あからさまな口吻であり、かの『孟子』（公孫丑上）に録されている泰然自若居士・柳下惠の如く達觀しえぬ事を愧ずとしながら、生理的にも当時の道学先生流に響覺する彼の面持ちがうかがわれよう。

しかも、格物窮理の金看板を掲げ、理を主として知を貴ぶと称する宋儒の学は、「天は理也、鬼神は陰陽の靈也、理は我れに在りと。」^⑤嘯^{せう}く者として、その心すでに傲然不恭なりと不快をもらし、かく倨傲でありながら、「敬」を説き、かつそれを求めようとも得ざるは当然とする。「故に徒らに其の心を持して出入せしめず、之を命けて敬と曰ふ。夫れ其の心を持する者も亦心也。心を以て心を持し、兩者交戦して已まざる。是れ浮屠の下なる者すら、猶ほ且つ爲さざる所也。故に徒らに敬を持せんと欲する者は、未だ能く成す者有らず。」^⑥居敬・持敬を実践綱領としながら、その実、恭敬莊慎独を具現しえてはいはしない、と。そもそも心を以て心を持するの企ては「浮屠の下なる者」、おそらく念佛者すらなまぬところ、ときめつける。

問者に対しては、「宋学を御止め被成候へと申候儀」として、「宋儒之經学につのり候人は、是非邪正之差別つよく成行き、物毎にすみよすみ迄はきと致したる事を好み、はては高慢甚敷怒多く成申物に候。風雅文才之のびやかなる事は嫌ひに成行き、人柄悪敷成申候事、世上共に多御座候。」と直言して、人欲は天理の前に抑圧さるべしとする宋学風を譏り、そのリゴリズムの行きつくところは、かくの如しと、峭嚴をもって鳴る山崎闇斎や慷慨の士浅見綱斎を悪見本に引き出す。「世上にて俗人之申候は、学問したる人は人柄悪敷と申候偽にて無之候。御両所共に国政をも

御聞被成候御家筋之由、一入宋学之害を御受不被成様に仕度存候^⑦と、すすめて。

程朱^⑧風に染まっていたらしい問者二名に対する徂徠は、「惣じて学問之道は心を向上に立て程朱をいかめしく思召候はば程朱程に可成と可被思召候。程朱は誰人にもたよらず直に經書を学び漸くあの位に成被申候。今程朱之跡に付御学び候ては、程朱ほどに可成様曾而無之候。程朱之被学候通に被成御学被成。博く学たる上にて、兎角程朱之説宜敷思召候はば、其時に程朱を御用候がよく御座候。只今程朱を信仰被成候は只人そやめきと申物に候。」と語ったのち、「愚老が門風は、只如此誰にもたよらず直に古聖人之書より見開き候を専途に仕候。」と宣するのであった。

以上、徂徠の目に映じた「道学者」像は、「理に酔ひ」、「是非邪正之差別つよく成行き、物毎にすみよりすみ迄はきと致したる事を好み」、ついには「天我れに在り」と傲語し、「心を以て心を持」せんとしつつ、「未だ成す者」なく、むしろ「人柄悪敷成申候」ところの者なのである。ここには、すでに宋学を以て形式主義、合理主義、自律主義、楽天主義、個人主義と批判し、その対極に立つ徂徠の志と学問が、なまなましい口吻をもって語り出されていた。今、いささか大胆ながら対比してみると、次のようにならうか。

宋学

徂徠

形式主義

現実主義

(經書講説)

(実学活論)

合理主義

不可知主義

(格物窮理)

(天地不可測)

自律主義

他律主義

(理氣説)

(礼楽刑政)

楽天主義

悲観主義

(万人成聖人)

(聖人不可至)

個人主義

国家主義

(修己)

(平天下)

(注)

- ① 「徂徠先生學則一」・『荻生徂徠全集』第一卷（みすず書房、一九七三年）三頁。
- ② 「學則 二」・前掲書 一七頁。
- ③ 「徂徠先生答問書 中」・前掲書 四五七、四五八頁。
- ④ 徂徠集 卷之二十二「与平子彬書」（第三書）・日本思想大系36「荻生徂徠」（岩波書店、一九七三年）五〇三頁。
- ⑤ 弁名「恭敬莊慎独」第二則・日本思想大系 一二七、九七頁。
- ⑥ 同。
- ⑦ 答問書下・全集第一卷 四八二、四八三頁。
- ⑧ 同。

二、道難知亦難言

さて、本稿は「徂徠における聖人の概念」の前篇を成すものであるが、その彼の聖人論の根底に深く関わりあうのは、不可知論 Agnosticism とも言うべき彼の認識論上の立場である。日常現象界の彼方に不可測な世界・天意の世界を措定することによって、その媒介者・伝達者として聖人があらわれて来ることになる。まず何よりも彼は主著の一つ「弁道」開頭において「道は知り難し。亦言ひ難し。其の大なるが爲の故也。後世の儒者、各々見る所を道とす。皆一端也。」^①と宣する。「弁道」と題して、そもそも「道」を「弁」ぜんとする書の第一声が、道は知り難く、言ひ難しとは面妖なことと言つてよい。しかし、この前提こそ徂徠特異の所。しかも彼は「聖人と雖も知らず能くせざる所有り」と、「中庸」の子思を引照して彼一個の独断でないことを証する。

また、「凡そ天下の事は、人力半ばに居りて、天意その半ばに居る。人力の能くする所は、人能くこれを知る。而

うして天意の在る所は、すなわちこれを知ること能はず。^②」として、人間が不可知の世界、天意によつて、大きく支配されており、それへの尊信を説くのである。この限界を忘れて、「苟能尽^{いやくもく}理^リ。則^チ天^ハ在^レ我^ニ」^③とするような宋学は、天上天下唯我独尊と戒める。「先王の道は、天を敬し鬼神を敬するに本づかざる者なし。これ它なし。仁を主とするが故なり。後世の儒者は、知を尚び、理を窮むるを務めて、先王・孔子の道壞れぬ。理を窮むるの弊は、天と鬼神と、みな畏るるに足らずとし、しかうして己はすなはち傲然として天地の間に独立するなり。これ後世の儒者の通病にして、あに天上天下唯我独尊ならずや。かつ茫茫たる宇宙、果して何ぞ窮極せん。理はあに窮めてこれを尽くすべけんや。その我ごとくこれを知ると謂ふ者も、また妄なるのみ。」^④と。

明らかに、徂徠は人知の限界、人間の認識範囲に制限のあることを自覺しており、人間の小智をもつて、宇宙の大を窮めようとの態度を憎む。「弁道」と並んで彼のライフワークたる「弁名」の冒頭においても、「生民より以来、物あれば名あり。名は故より常人の名づけたる者有り。是れ物の形ある者に名づけたるのみ。物の形なき者に至りては、則ち常人の賭ること能はざる所^⑤」と第一声を放つて、この立場は不動である。

これかあらぬか、「弁名」の全三十四章のうち、「天・命・帝・鬼・神」の章は十七則を擁して、最多の紙幅を占め、天の神妙なることを述べること甚だ精彩を放つ。まず、「天は解を待たずして人の皆知る所也。之を望めば蒼蒼然冥冥乎として得て之を測る可からず。日月星辰焉に繋り、風雨寒暑焉に行はれ、万物の命を受くる所にして、百神の宗なる者也。至尊なること比無く、能く踰えて之を上ぐ者なし。故に古より聖帝・明王、皆天に法りて天下を治め、天道を奉じて以て其の政教を行ふ。是を以て聖人の道、六経に載する所、皆天を敬するに帰せざる者莫し。是れ聖門の第一義也。」と大上段に説きおこし、「学者先づ斯の義を識りて、而る後聖人の道、得て言ふべきのみ。」と宣したのち、ただちに朱子学の合理主義を身の程を知らざるものと難する。「後世の学者、私智を逞しうして自ら用ふるを喜び、その心敖然として自ら高しとし、先王・孔子の教へに遵はず、其の臆に任せて以て之を言ひ、遂には『天は即ち理也』（論語・八佾「獲罪於天」の朱注）の説有り。其の学は理を以て第一義と爲す。其の意に謂へらく、聖人の道は唯理のみ以て之を尽くすに足れりと。此れ其の見る所を以てして、『天は即ち理也』と曰ふときは、則ち宜し

く以て其の天を尊ぶの至りと爲す可きがごとかるべし。」しかし、これが一見、天をきわめて尊ぶが如く見えながら、実はとして「然れども理は諸れを其の臆に取りて、則ち亦『天は我れ之を知る』と曰ふ。豈不敬の甚だしきに非ずや。⑧」と非難してやまない。

以下、「嗚呼、天豈人の心の若くならんや。蓋し天なる者は得て測る可からざる者也。故に曰はく、『天命は常靡し』(詩經・大雅、文王)、『惟れ命は常においてせず』(書經・康誥)と。古へ聖人、欽崇敬畏に之違あらず、是くの若く其れ至れる者は、其の得て測る可からざるを以ての故也。⑨」と、天知り難きの論を倦むことなくつづけ、また言い難きの論としては、「天道は豈一言を以て尽くす可けんや」とし、「諸老先生、聖知もてみづから処り、天を知るを以て自負す。故に喜びて精微の理、古聖人の言はざる所の者を言ふ。道に戻るの甚だしき者と謂ふ可きのみ。」と断する。こうして、次の有名な言葉が発せられるのである。「夫れ天なる者は知る可からざる者也。且つ聖人は天を畏る。故に止『命を知る』と曰ひ、『我れを知る者は其れ天か』と曰ひて、未だ嘗て天を知ると言はず、敬の至り也。⑩」と。

そもそも『天を知る』と言うのは子思・孟子から始まつたけれども、それはまだ人の本性が天から命ぜられたところであるとか、天は善人に味方することを知ると言つたような意味に止まっていたのであるが、ともかくも彼らが弁を好むにまかせて、『天を知る』などと発言したために、諸老先生が囂然として天を言うに至つたのである。

さて、徂徠のこうした不可知論は天地が活物であり、人間もまた活物であるとの意識に裏打ちされていた。少しく話題に捉われ過ぎる嫌があるが、彼の活物観の一例を挙げよう。元代に作られた「授時曆」は世の推崇する所だが、これを信じないと彼は言う。なぜなら、それが高々三、四十年の観測をもとにして立てたものであり、宇宙の大の前には甚だ心許なきものと考えるからなのである。彼曰く、「不佞を以て之を思へば、日月に盈縮有り、一年にして初に復す。故に曆家能く之を言ふ。歳差の如きも、安んぞ其の天の盈に非ざるを知らんや。堯より今日に至るまで、人其の盈を見て、未だ其の縮を見ず、安んぞ数千歳の後必ず縮せざることを知らんや。何となれば則ち天地日月は皆活物なればなり。」⑪と。

つまり、たとえ堯より今日まで盈を見るとしても、数千年後には逆行して縮することになるかも知れないではない

か、と言うのである。宇宙の悠久の前の人間の歴史の短小なること、自然の広大の前の学問の些細なることが、如何に彼において認識されていたかを伝える話題ではあるまいか。あるいは、彼、十四才より二十五才ころまで、流罪に服す父と共に過ごした草深き上総の地で、朝夕ふれた自然。人家屋上を重ねて櫛比する江戸では思いも寄らなかつた蒼穹、涯しなき太平洋、さては海より出でて草辺に没し行く日輪と言つた自然の営みの前に、人間の渺たることを実感した自らの体験が語らしめたものであろうか。次の文章に、その上総時代の風物誌が見られると思うのは如何であらうか。「風雲雷雨に限らず、天地の妙用は人智の及ばざる所に候。草木の花さきみのり、水の流れ山の待ち候より、鳥のとび獣のはしり、人の立居物をいふまでも、いかなるからくりという事をしらず候^⑬」と。

さらには、彼、三十八才の年に元禄の関東大地震がふるい、四十二才の年には富士大噴火して、宝永山を突出させるといふ天変地異の勃発。こうした自然の脅威の前に人間の理屈は有つて無きが如く感ぜられるのは当然であり、「理学者の申候筋は、僅に陰陽五行などと申候名目に便りて、おしあてに義理をつけたる迄に而、それをしりたればとて誠に知ると申物にては無之候。其様に知候をしりたりと覚候浅猿さに、国家を治むる道をも只其様にこそ知りたれと存候。神妙不測なる天地の上は、もと知られぬ事に候間、雷は雷にて可被差置候^⑭。」という言葉が反響して来るのである。それにしても、「雷は雷にて可被差置」との一言は、これ以上印象的に認識の限界を表明しうることにはなからうと思わせるものではないか。

すでに彼の趣旨は、以上によつて十分であらうが、もう一つだけ同趣旨の発言を引用しておこう。「格物致知と申事を宋儒見誤り候てより、風雲雷雨の沙汰、一草一木の理までをきわめ候を学問と存候。其心入を尋ね候に、天地の間のあらゆる事を極め尽し、何事もしらぬ事なく、物しりといふ物になりたきといふ事迄に候。中庸に雖「聖人^レ有^レ所^レ不^レ知と御座候を、凡人の智慮にて何として知り尽すといふ事可有之候哉。宋儒の説は、人のならぬ事を立てて人を強ゆるにて候。是よりして一物不知を恥とすといふ事を儒者盛んに申候。皆高慢の心入りにて、聖賢の道には曾而無之事に候^⑮。」と。

旧約聖書の「ヨブ記」は、義人ヨブの苦難を主題として、四人の友人が賢人氣取りに論議しまくり、ヨブが反論す

る様を描くものであるが、いずれも葦の髄から天をのぞく管見に過ぎず、ついに大風の中から主なる神が声を発することとなる。それが天地自然の妙を以てするもので、あたかも徂徠の論旨に共鳴して思い出されるのである。すなわち、「無智の言詞をもて道を暗からしむる此者は誰ぞや。なんち腰ひきからげて丈夫のごとくせよ。我なんちに問わん、汝われに答へよ。地の基をわがすゑたりし時なんぢは何処にありしや、汝もし悟りあらば言へ。なんち朝にむかひて命を下せし事ありや。なんち海の泉源にいたりしことありや。なんち地の広を看きはめしや。なんち雪の庫にいたりしや。なんち昂宿の鍵索を結びうるや。参宿の繫繩を解うるや。なんち牝獅子のために食物を獵や。云々^⑧」と。自然どころか、自然を創造り、養育する神の、人智に対する挑戦であり、ついにヨブは「嗚呼われは賤しき者なり、何となんぢに答へまつらんや、唯手をわが口に当んのみ^⑨」と平れ伏し、「われは自らさとらざる事を言ひ、自ら知らざる測り難き事を述べたり^⑩」と告白する。もって他山の石とすべきか。

また、大陸合理論者として認識の無限の可能性に拠っていたカントが、英国経験論に接して夢覚め、知りうるものは現象のみとして、信仰に道を開けたことも思い合わされる。あるいは徂徠の所説に接した当時の儒者たちは、これに類した衝撃と転換を覚えたかも知れぬ。まことに、「道は知り難し、亦言ひ難し。其の大なるが為の故也^⑪」なのである。

以上、もっぱら天地活物觀を追つて来たが、天地ばかりか人もまた活物なのであり、まして活物同士、天地と人の出会いともなれば、無尽の変動となる。「天地も活物、人も活物に候故、天地と人との出合候上、人と人との出合候上には、無尽之變動出まり、先達而計知候事は不成物に候。」^⑫なのである。人間明日の事はわかるまい。人生の浮沈誰か知る、神のみぞ知る。豪傑徂徠も一個の人間として、いや人一倍の運命に運ばれて、天命の測り知りえざるを体験した。はからずも十四才にして上総の地に起き伏しする身となつたが、その一見不幸と見えた十年にわたる南総の日々が、かえって活社会に親近することを得しめ、読書三昧の利益をもたらし、都に遠ければ朱子学に染まらず、彼独自の学問体系を醸成せしめるものとなつた。

その学問を開眼させてくれた季攀竜・王世貞の書に出会えたことは、まことに天寵であり^⑬、さらには東夷の人に

して、残された経書の中から道を体得できたことの不思議さを深く感ぜずにはいらなかったのである。二十五才にして、ようやく江戸に戻ることになるが、たまたま芝増上寺門前に塾を開いた事から、なんと一佛僧の口ききによって、時の権臣、老中柳沢吉保に登用されることとなり、將軍綱吉と対面し、江戸城中に出入して五百石どりの身となるにいたる。あるいはまた一人二人と妻に先きだたれるなどとは思っても見なかったこと。あまつさえ娘の死を如何ともなし得ないという人の無力。また牛込の居宅類焼の災難と、まさに、「凡そ天下の事は、人力その半ばに居りて、天意その半ばに居る。」^②の感なのである。

かかる天命の不思議を身にしみて体験した一個の生活者として、神秘を否定する宋儒風の理説は、その肌合合わないものであった。たとえば、何事も理屈にて済候事とする朱子学徒は「占」を否定するが、徂徠は勿論、人智人力の届かぬところに占・卜筮の存在を認める。「理学の過はいづれも皆少量に成、蟹の甲に似せて穴をほるごとく、何事をも皆己が身ひとつに思ひ取候故、聖人の道は国天下を治め候道と申事をばいつのまにか忘れはて、偶治国平天下の業を論候にも、只其理を知る心計になり、是を行ふ上には心付不申候。甚敷は人智人力のとゞき不^{たま}申天命の上の事も理にて参候之様に存候。是よりして聖人の卜筮を御用候事は御合點参不申候。御学問之功積り、次第に大量に御成候はば、御疑ひ有間敷候。」と、述べすすめる。

しかも徂徠は麹町六番町の大工の女房が飯をくつていると急に目が痛くなり、舍利が飛び出したことを録して、「天道は冥冥、孰れか其の由を識らんや^③」と語り、東北福島にある弁才天社では、いつも己巳の祭の日に奇端があらわれ、燈の如きものが、どこからか来て川に沿って上り、山を越え、ゆらゆらと空に駕し、廟の前の巨石の上に久しく止まって去る。その色は赤く、土人は海竜王の供燈だというとの話を録し、「夫れ精誠の萃^{あつま}る所ならん哉。」^④と感銘している。何か平田篤胤の妖怪趣味を偲ばしめるものであるが、もって、徂徠の神秘的気分は濃厚なものだったとなければならない。

もとより、これも先王・聖人とは無関係ではないわけで、先きに述べた占・卜筮にしても、「占と申事聖人の書にも有之候」、「聖人の卜筮を御用候事」^⑤と、必ず聖人の權威に基づかせている。また、鬼神、つまり人魂、天神は神

妙なもので、これを信ずるものも、「聖人の立つる所」とし、「故に、鬼なしと謂ふ者は、聖人を信ぜざる者」である。これを見えないから信じないと言うなら、天も命も同じく見えないではないかと反撃したのち、「故に学者は聖人を信ずるを以て本とす。いやしくも聖人を信ぜずして、その私智を用ひば、すなわち至らざる所なきのみ。」^⑦として、彼の信仰は、聖人を媒介とするという一面を有しているのである。このことについては、いよいよ次章で取り上げることになる。

ともかくも、以上のような一種の不可知論に基づく世界観・人生観は、徂徠自身の実存につながる反面、官学・朱子学への対抗というモチーフがあることは見逃してはならず、両者の相乗作用によって、高調されたのであろう。だが、今これを一応見終って、客観的に評価する時、彼が不可知の世界を指定したことは、かえって汎論理主義・合理主義がとかく落ち込むリリズムを避けさせ、人間の思考や生き方に一種の自由をもたらすという効果を呼び込んでいたのではないか。というのは、もしも天理が一切明らかにされてしまうならば、森羅万象、人事百般は委細かまわず、その天理によって規制され、規律されて行かねばならず、まさに「肅殺の氣」に満ちることになるであらう。けれども、もう一つの未知なる世界、不可測なる領域を置くことは、むしろ人間の思想や生活を天命に委ねるところという一種の自由をもたらすのであり、このことは徹底的な超自然主義に立つ基督教においても実感されているところであった。しばしば現実的合理主義が不可知論を伴なうと言われるのもゆえなしとしない。^⑧しかも、徂徠の生まれ合わせた時代は、文治主義と町人文化とを特色とする元禄時代であって、文芸各分野にわたって物事のありのままを、矛盾は矛盾なりに捉え、伝統の枠に従わぬ創造活動を許す気風はみなぎっていた。その中から生まれ、それに応じ、かつそれを促進するものとして、徂徠の学風を眺めることも出来るであらう。

(注)

- ① 弁道 一・荻生徂徠全集（みすず書房）第一卷 二〇〇頁
② 弁名 下「元亨利貞」岩波日本思想大系「荻生徂徠」一一八頁。

- ③ 答問書 上・全集第一卷 四三八頁。
 - ④ 弁道 二一・日本思想大系 36 二〇六頁。
 - ⑤ 弁名 上「序」日本思想大系 36 四〇頁。
 - ⑥ 弁名 下「天命帝鬼神」第一則 前掲書 二三五、一二〇頁。
 - ⑦ 同。
 - ⑧ 同。
 - ⑨ 同。
 - ⑩ 同、二三六、一二二、一二三頁。
 - ⑪ 同。
 - ⑫ 徂徠集 第二十四「復水神童」第二書 日本思想大系 36 五一四頁。全集 第一卷 六一頁。
 - ⑬ 荻生徂徠先生答問書 上・全集 第一卷 四三八頁。
 - ⑭ 同。
 - ⑮ 同。
 - ⑯ ヨブ記 三八、三九章。
 - ⑰ 同 四〇章。
 - ⑱ 同 四二章。
 - ⑲ 弁道 一・前掲書 二〇〇頁。
 - ⑳ 答問書 下・前掲書 四六二、四六三頁。
 - ㉑ 徂徠集 卷二十二「与富春山人」第一書・尾藤正英「荻生徂徠」(中央公論社) 二六三、二六四頁。
 - ㉒ 弁名 上「元亨利貞」・前掲書 一一八頁。
- また「唯天ノ命スル所ニヨリ、其器ヲ成就シ、材能ヲ達シテ、天職ニ代リテ務ルハ、古ノ道ナリ。故ニ辺国田舎ニ生レテ、良

キ師や学友モナク、偏屈ナルモ命ナリ、又良キ師良キ学友ヲ得テ、其道ヲ聞キ達秀スルモ命ナリ、家貧ク書籍ヲ得ル事難ク、学問ノデキカナルモ命ナリ。……自^レ天佑^レ之トアリテ、神ノ助け通ズル事アルベシ。」(經史要覽卷之上三二丁・全集第一卷五一八頁。)

②③ 答問書 下・前掲書 四六三、四六四頁。

②④ 徂徠集 卷十三「舍利記」・日本思想大系 七三二頁。

②⑤ 同 卷十四「福島妙音廟碑」・前掲書 七三一頁。

②⑥ 答問書 下・前掲書 四六二、四六四頁。

②⑦ 弁名 下「天命帝鬼神」第十一則・前掲書 一三七、一二九頁。

②⑧ 金谷 治「荻生徂徠集」(筑摩書房)二〇頁参照。

三、以^レ信^レ聖爲^レ先

然らば、その人知人力の及ばない不可測な天意は何によって知らされるのであろうか。それは「聖人」によってである。と徂徠は言う。先きに引用した「弁名」冒頭にも「物の形亡き者に至りては、即ち常人の賭る能はざる所の者にして、聖人立ちて名づけたり。然る後に常人と雖も見て之を識る可き也。」^①としており、「私智を以て天を測る」^②ことはならないのである。

窮理に熟をあげ、説を成し、陽に先王・孔子を尊びつつも陰に悖るの徒輩は、「其の意に自ら謂へらく、能く古聖人未だ発せざる所の者を発すと。而して自ら其の先王・孔子に勝りて以て之に上たらんことを求むことを知らず。」と難じ、「夫れ聖人の教へは至れり。豈能く勝りて之に上たらんや。凡そ聖人の言はざる所の者は、^{すなは}適^ち当に言はざるべき所の者のみ、若し当に言ふべき所の者有らば即ち先王・孔子既已に之を言はん。豈未だ発せざる者有りて、後

人を待たんや。亦思はざるのみ。」^③として、聖人こそ真理の規範であり、聖人語ればこれを聞信し、聖人黙さばここに止まるの謹嚴を説く。

成程、これに対して、宋儒の徒は言おう。聖人の教えに従うことは当然として、なお何故、その教えに聴従するかの理をわきまえねばなるまい、と。かかる言い分に対応する徂徠は真向から言う。「世の宋儒を爲す者は猶ほ且つ以て然りと爲さず、必ず將に曰はんとす。『礼義なる者は誠に聖人の立つ所也。然れども苟くも聖人の礼義を立てし所以の理を知らずして、徒らに其の所謂る礼義なる者を守らば、即ち非礼の礼、非義の義の由りて生ずる所なり』と。是れ宋儒の窮理に務むるの意と言はんのみ。殊に知らず、是れ其の聖人に勝ちて之に上たらんと欲する者なるを。亦自ら揣らざるの甚だしき者なり。何となれば、是れ聖人の教えに循はずして、先ず聖人の心を獲んと欲する者なれば也。天下、豈之有らんや。」^④と突撥ね、「聖人の教へは詩書礼楽なり。習ひて之に熟し、黙して之を識れば、即ち聖人の礼儀を立てし所以の理も、亦得て之を見る可きのみ。」^⑤として、窮理でなく習熟、理解でなく黙識を主張する。そして、「今、必ず学者をして先づ其の理を知りて而る後に之を行はしめんと欲すれば、則ち亦学者をして人ごとに各々聖人の権を操らしめんと欲する也。」つまり一人一人に聖人たるの権利を獲しめようとするの暴挙であり、もしもそうであるならば、「是れ安んぞ夫の聖人を用ひんや。」であり、「故に窮理の失は、必ず聖人を廢するに至る也。」^⑥と、する。

まさに、「この外に奥深きことを存せば二尊のあはれみにはづれ本願にもれ候ふべし。……智者の振舞をせずして、唯一向に念佛すべし。」との『一枚起請文』における法然の言葉を思い出ださしめ、西山善慧房證空の白木念佛に通ずると見える聖人尊崇、聖人信仰である。もつとも、彼は儒者であり、輪廻転生について問われるや、「愚老は釈迦をば信仰不仕候。聖人を信仰仕候。聖人之教に無之事に候得ば、たとひ輪廻と申事有之候共、とんぢやくに不及儀と存候。其子細は、聖人之教にて何も角も事足候而不足なる事無之と申事を愚老は深く信じ候故、如此了簡定まり申候。」^⑦と宣言し、「聖人之道は甚深広大にして、中々学者の見識にてかく有べき筈の道理と見ゆる事にてはなき事也。しかるを我知り顔に成程尤かくあるべき筈と思ひたらんは、聖人へ此方より印可を出す心根。誠に推参之至極と言つべし。

其上聖人の道を己が心のかねに合せて成程尤かくあるべき筈と浅墓にきはめ行時は、後々は己が心に合たる所計を取りて、己が心に尤と思はぬ所をば棄る事に成行申候故、聖人之道と存候得共、皆々己が臆見に成申事に候。かくのごときの見識長ずるに随ひて、見識浅露迫切になりて、聖人之道甚深広大なる筋とは日々に遠ざかり行、果は高慢甚敷成行事に候。⑧としたのち、「愚老杯が心は只深く聖人を信じて、たとひかく有間敷事と我心には思ふとも、聖人の道なれば定めて悪敷事にてはあるまじと思ひ取りて、是を行ふにて候。行ひ熟して後は、習與^レ性成、習慣如^二天性^一候故、坦路を行くごとくに成候事に候。」⑨と明言して憚らない。

まこと、蟹 養斎の「非徂徠学」における次の批評が発せられるゆえんである。「徂徠之教、以^レ信^レ聖爲^レ先、其意則美矣、然其爲^レ学不^レ欲^レ知^二其所^一以^二当^一信^一、則何異^二於老婆之信^二弥陀^一哉^⑩」と。なるほど、朱子学者の立場から見れば、信仰に韜晦して立論の根拠を蔽うものとして、独断論・独我論の謗りを受けるかも知れない。けれども、一旦、人智の限界をわきまえた場合、その限界を越えては一種の啓示を信ずるは当然のことであり、むしろ徂徠の方からすれば合理主義的な朱子学の所説こそ、人知の限度を超えた空理空説と切りかえしも成立しうるのである。しかも、知りえざるところは信ずるとすることは、そのかわり、知りうることに關しては、厳密な古文辞学によって追及してやまなかつたわけであり、それがむしろ空理空説に落ち込まぬ好果を獲ることとなるのである。

(注)

- ① 弁名 序・日本思想大系 36 二〇九、四〇頁。
- ② 弁名 下「天命帝鬼神」第一則、日本思想大系 一三三五頁。
- ③ 弁道 二一・日本思想大系 36 二〇六、三〇頁。
- ④ 弁道 下「理氣人欲」第一則、日本思想大系 36 二四五頁。
- ⑤ 同 一五一、一五二頁。
- ⑥ 同。

- ⑦ 答問書 中・全集第一卷 四五二、四五三頁。
- ⑧ 答問書 下・全集第一卷 四七七、四七八頁。
- ⑨ 同。
- ⑩ 日本儒林叢書 第四冊 論弁部・蟹 養斎「非徂徠学」二〇頁。

〔日本思想 専攻〕